

いくターミナルケアのような概念が基本になつていくわけです。地域の医療・介護機関の分業体制を整えて、一人ひとりが健康管理をできるような予防医療のような概念です。病気になる、痴呆になるのを遅らす、というのが一番効果的で人間的なわけです。

例えばスウェーデンの場合にはオイルショック後に財政危機があつて、自治体の統合をして、何千もあつた自治体を何百にしたのです。その結果、福祉は対人サービスですから、地域に密着した実情に応じられなくなつて、官僚的なサービスになつてしまつた。そこで、92年エーデル改革を行い住民のニーズに合わせる仕組みをつくつた。地区評議会にターミナルケアの病院をつくり、予算を丸投げし、一定の会計準則を決めて、その中で工夫してください、というやり方をしたわけです。

日本の医師会もこの頃は、このままではやつていけないのがわかつているから地域医療と言ひ始めています。それが大きな歴史の流れなのに、どういうふうになつて具体化していくのか日本にはモデルがない。先進国にふさわしい地域のモデルみたいなものをつくつてほしいというのが中田さんに期待しているところです。

市民の生活不安は「自分の老後や病気」

【中田】 横浜市民の意識調査では、平成13年9月の数字ですけれども、横浜市民の生活満足度は「満足している」が28・1、「まあ満足している」の48%を足すと合計で76・1%が満足しているんですね。これは全国的な数字と比較すると、全国だと「満足している」

が9・5、「まあ満足している」が54・2、足して63・7ですから、13%の開きがあることになるわけです。だから全国的に見ても横浜の場合は、生活に満足している人の割合が非常に多いわけですね(注10)。

では、満足度が全国的に見れば高い横浜市民の心配事は何ですかと問うと、28・3%で断トツのトップは、「自分の病気や老後のこと」、その次は24・4%で「家族の健康や生活上の問題」ということになるのです。例えばインフラの整備だとかに不満だとか不安があるというわけではない。先生がよくおっしゃつていた、「危機管理」みたいな。

【金子】 リスク管理。

【中田】 リスク管理。私は不安管理を、市がどれだけできるか、がポイントだと思います。【金子】 今、個人にとつての最大のリスクなんだね、病気と老後。

【金田】 今、世界の流れの話がありましたけれども、論点が二つあるのではないかと思つてはんとつと活用できるお金が幾らあるかという中で、福祉や介護にかかるお金はどうするのか、という問題。横浜の住民の要望を見ていると、トップ・プライオリティーは福祉や介護のほうなわけですね(注11)。横浜市政に関係している人全体が、そういう認識を持てるかどうかというのが一つの論点。

もう一つは、今先生が言われた、福祉や介護にお金を使っていくというふうになつたときに、対人サービスの部分をどんなやり方で行つていくのか、その辺の認識ギャップがすごくあると思つてます。

介護における公民の役割

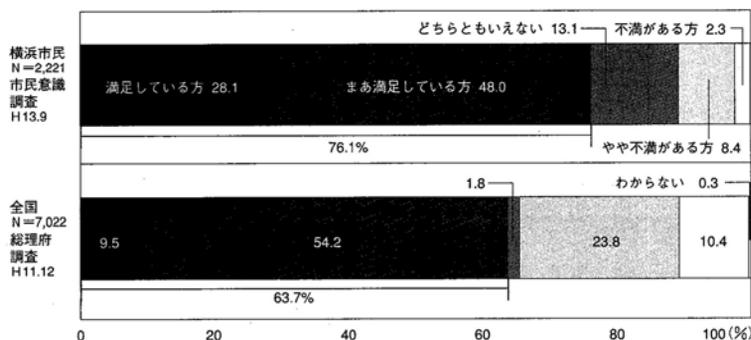
【金子】 まず僕が思うのは、そういう福祉のニーズは潜在的で出にくい。まず利益団体にならない。これを民間ベースでやると、クリーム・スキミングというのですが、要するに弱者が全部取り残されてしまう。では、官が画一的にやればいいのかというと、そういう問題ではない。今までの措置制度の弊害というのがあるわけで、多様なニーズに応えられない。

ところが、介護保険は、本人負担を1割にしたためにサービス受給抑制が起きている。横浜では起きていないのですが、どうしても規模の経済が働く地域のみがうまくいく。都会の中心は相変わらず家政婦協会に依存していたり、郊外はボランティアの活動もあり、中間領域はうまくいく一方で、人口が希薄な地域はうまくいかななくなるという問題があり、地域の温度差があるんですね。

それぞれに官と民の組み合わせ、民といってもNPOのようなものの組み合わせも、非常に工夫が必要です。地域ニーズを徹底的に掘り起こすのは、横浜市全体というニーズを明らかにするだけではなくて、横浜市の中の地域の濃淡をくつきり浮かび上がらせる必要があります。全国でも違う方式があるように、横浜の中でも、共通のベースにすること、地域ごとに違うということを仕分けしなければいけない。ごく基礎的な作業が、実はどの自治体でもやられていない。始まつたばかりということもあるんですね。

もちろん、国の制度で変えなければいけない部分がたくさんあると思つてます。横浜市だけでは限界がある。僕はケアマネージャー

●横浜市民の生活満足感 (注10)



資料：「横浜市民意識調査」(平成13年)



結果的にいい医療サービスをしているのはNPOなんです。公益法人の病院なんです。株式会社

の病院は実は必ずしもいいとは言えない。そうすると、実は医療や介護の領域で非常に大事になるのはNPOなのではないかと思

うんだ。中田さんは、市政の主体として非常に重要視しているでしょう。横浜市民というの

は意識も非常に高いし、所得にある程度ゆとりのある、参加意識を持った人たちがいるので、そういう領域でNPOが一番いい

ようつがいになる。NPOをどう育てて、地域の中でそういう人たちをどう組み込んで

けるか。例えばリタイアした老後の人たちが、報酬は高くないけれどもNPOで参加して

高齢者の社会参加を促したり、介護サービスをやって生きがいを見出すようなことができ

れば。

横浜は風光明媚、温暖、港がある、高級なブランドイメージ、そこで老後も、病氣も安心

ということになったら、日本一高い地価になっちゃう危険性はありますけれども。(笑)

【中田】NPOを信じていいのかという話もよく言われるし、官としての責任放棄ではな

いかみたくない言われ方をしたりもするわけです。でもそうではなくて、あくまで責任は私

たちが行政が持つのですと言っているのが一つ。NPOについても、その活力を信じて参

加をしてもらう習慣、例をつくっていかねればだめなんです。横浜がまず先鞭をつけて、

そういうNPOに働いていってもらう。

当面の間は行政から選ばせてもらいますよという部分もあるかもしれませんが。そういう

中でいいNPOをどんどん育てていく。

#### 行政とNPOの協働関係

【金子】そのときにすごく大事なものは、官の役割なんです。人命を扱うときにこういう資格を取りなさいとか、ヘルパーの何級とかを

持っていないと最低限のルールを整える。NPOも自分たちでアソシエーションを

つくってモラルを高めていってルールをつくっていくことが大事なんですけれども、そ

うものを手助けしていったり、一定の水準を確保するためのルールづくりという点で公

平な、官の役割がすごく大事なんです。

【中田】それは経験則の中からしか生まれてこないですね。

【金子】そうなんです。

【金田】今、いろいろなNPOがあると思うのですが、役人はルールセッターではなくて、単に手続きを

進めていくことが仕事ですから、ルールを問われるということについて、非常に抵抗感

がありますね。それからNPOの側も役所に対して非常に不信感が強いんです。そこをどう越

えていくかというのが、とりあえず最初で最大の課題じゃないかと思えます。

【金子】市長がかけ声をかければ。(笑)

【中田】例えば、旧富士銀行のあの場所を利用して、参加意欲のあるNPOにプレゼン

してもらいます。どういう公的なメリットを私たちはつくれるか。その中からいくつか旧

富士銀行の跡地に入ってもらって行政との協働作業を始めていこう。門戸という意味では、

みんな応募していいわけです。だけど、応募した中から、よし、まずここから始めてみよ

うといういくつかを、行政サイドとしても一つの実験例としてつくっていくという形です。

#### 新たな独自モデルへの期待

【金子】それはいいですね。こういう状況の中ではやっぱりいいモデルがないとね。こ

こでモデルをつくるというのは、大変だけれど、それだけに今は多分、時代の先端なんです

よ。残念だけれどね、ほんとは国政でもっと今の日本の状況を変えてほしいんだけど

【中田】国政は現場を持たないからダメなんです。中央官僚もそうだけれど、現場を持

たずに、神学論争と机上の論争をやっている部分があるから。

【金子】そうなんだよ。人々と直接かかわっていないんだね。

【中田】だから成功モデルをつくることにはできないですよ。さっきから言っている一つの

実例としてのモデルをつくるのは、現場を持っている人たちです。

【金子】期待していますよ。

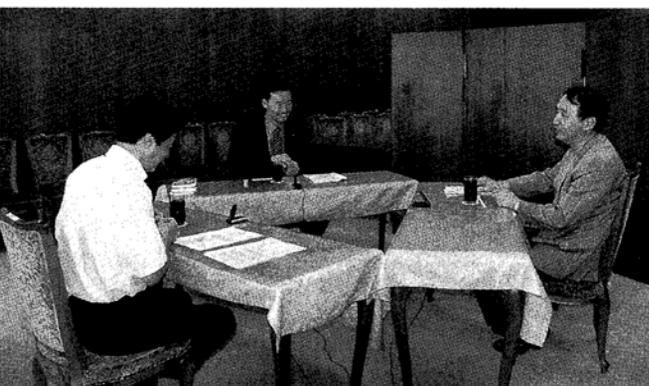
【金田】NPOをどう生かすかということ、まとめていただきました。最後にそれぞれ、

お願いいたします。

【金子】具体的で、とても期待が持てるなと思うのは、状況認識が的確で、長期停滞時代

にふさわしいやり方だ、という点です。行政が変わらざるを得ない、税収も減ってくる

という中で、市債残高5兆円ということですが、これ以外にも多分隠れた借金がたくさんある



中で、新しいモデルをつくっていかうという点で、僕はすごくいいなと、思います。

今までの市政ではとてもたないという状況の中で中期財政ビジョンで、住民に直接情報を開示して語りかけていくという方式、それから新しく公共的な空間をつくっていく、しかもそれはニーズの高い領域でやっていきましようという方向が、すごくいいと思います。

さつきも言いましたけれども、それがまち全体の、横浜というブランドの持っているアイデンティティーを高めていくような政策になっていくのだと思うのです。まちづくりもそうだし、今の医療や介護のこともそうなんですね。

ここで中田さんの新しい行政スタイルが成功すれば、おそらく、単に横浜だけではなく、日本全体に対して大きなインパクトを与えるだろうし、成熟した社会の新しいモデルが生まれる可能性を秘めているのではないかと、僕は、僕は大いに期待しているんです。「朝まで生テレビ」で時々意見も対立しましたけれど、実はそういう部分にすごく期待しています。

田中康夫氏は、長野オリンピックの過程の公共事業で財政が破綻しそうな中で新しいモ

デルをつくろうとする。北川知事は、妥協しながらも少しずつ変えていこうという路線です。いろいろなパターンの地方が出てきたので、中田さんは独自の色で、今の横浜で新しい独自のモデルというものを創出してくれると、日本の選択肢というのがもつと高まるかなという期待もあります。

#### 自発性を引き出す中田スタイル

【中田】要するに変えるやり方ですね。強力なリーダーシップで変えるか、相手のことを斟酌しながら、妥協しながらでもとにかく物を前に進めるか、私の変え方は、自発性をいかに引き出すかということだと思っんです。それは市民の自発性もそうだし、あるいは、横浜という自治体を構成する人々、これは民間の企業もそうだし、NPOもそうだし、役所という地方公共団体もそうです。いかに自発性を引き出すことによつて物を変えていくかというやり方が、実はもしかしたら一番急がば回れなのかもしれない。強力に権力を行使しながら変えるというのは、一つの社会の継続性というか、持続可能な仕組みとしては脆弱だと思っんです。自発性を持って参加をしてもらう、何がしかの形で自分がかかわった仕組みをつくるのが、やがて横浜に住ん

でいく人にとつて、その仕組みを間違えないで利用していく上で必要だ。仕組みというのはいつたんでき上がった一つの現実になつてしまいますから、それに賛成した人も、ある意味では反対した人も含めて、その仕組みというものを理解して運用していく。新しく横浜に移り住んできた人にも、市役所が説明をしなくても市民が説明できるといふような、持続可能な社会システムをつくっていく上では、自発性を引き出すやり方を私はしていきたいと思っんです。

【金子】それが情報の徹底的な開示であつたり、権限の委譲であつたり、参加の仕組みを整えるということなんだと思っんです。これも一つの大きな特色だと思っんです。時の流れをうまくつかんだ形でそれを組み込んで実現していけば、急がば回れと言つたけれども、成功する可能性は十分にあるんじゃないかと思っんです。大変だと思っんですが、僕はそういう意味では大いに期待しています。

【中田】ありがとうございます。

【金田】今日は、お忙しいところどうもありがとうございました。